

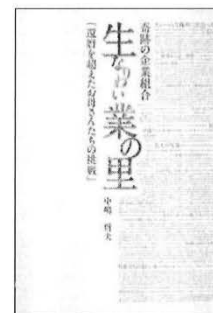
奇跡の企業組合 生業の里

◆限界集落の企業組合に純粋な目標管理をみた

「たいへんな場所に出会った」の書き出しから始まる本書の舞台は、新潟県と山形県の県境にある、村山市（旧山北町）の山熊田集落。19世帯、48人の、いわゆる限界集落だ。マタギが住み、焼畑で赤カブを作り、しな布（しなの木の樹皮の繊維を織った織物）を織り、灰汁笹巻き（米を三角形にまとめ、笹を巻いて灰で煮た保存食）を作る。かつての山の暮らしを維持している。登場人物は70歳オーバーのお母さんたち。タイトルにもなっている「生業の里」という名の企業組合を、還暦を過ぎた年齢で立ち上げた5人のお母さんたちのお話だ。

起業のきっかけは1998年、フランス日本年の行事として開催された「稲と麦のフェスティバル」。生産者を代表して、先に紹介したしな布の実演をフランスで行った。海外渡航の経験もなかったお母さんたちだったが、しな布が認められる誇らしい経験と、異国の地で気づいた自分たちの暮らしの価値に、「おれたちも

中嶋 哲夫 著
博進堂
2016年10月15日
83頁
900円＋税



なんかやりてえ！」と一念発起し、5家族で500万円ずつを出資、同時に賛同者からも出資を請い、借金もして2,500万円の資金で起業した。事業内容は集落の生業に根差し、売上も安定している。

著者は、本誌のコラムコーナー「人事も歩けば」を執筆する、MBO 実践支援センターの中嶋哲夫氏。2001年から15年間、丹念に取材を重ね、本書を書きあげた。限界集落にある企業組合に、業務の柔軟な役割分担と、純粋な目標管理の実践をみたと結んでいる。理屈ではない「仕事」の本質を感じることができる一冊だ。

本書は、山熊田集落のある新潟県の地元企業、博進堂のオンラインストアで入手できる。



ねむの木村

遠州の報徳運動を調べるため、静岡県掛川を訪ねました。何か所かを車で移動する途中で出会いました「ねむの木村」という道路標示。つい先日、NHKの放送を観て、印象に残っていた場所です。90歳になろうとする宮城まり子さんの気概、森のなかの美しい建物、スリッパのタップダンス、鮮やかな色使いの絵や、声がまっすぐに伸びるコーラス。

機会があれば、見てみたいと思っていました。ここで出会った限りは、神様の導き。予定を変更して「ねむの木村」を訪ねました。



中嶋哲夫の「人事も歩けば」

「ねむの木福祉会」は、女優の宮城まり子さんが静岡県の浜岡町に設立しました。1968年のことです。肢体不自由児のための養護施設を作るためです。その後、学園を卒業した子どもたちのための療養施設などを充実させ、1997年には、現在地に移転しました。半世紀に渡る取り組みの結晶です。

村は、里山の谷筋に沿って展開しています。村の端から端まで歩けば30分くらいかかるでしょう。掛川駅からの路線バスもあります。そこに学園があり、生徒の生活の場があり、成人した生徒のための仕事場もあり、職員の住宅もある。また喫茶店やショップ、美術館、吉行淳之介文学館もあります。オレンジ色の美しい屋根、原色が華やかな壁、楽しい建物が明るい雰囲気を作ります。紅葉で埋



▲ドングリ屋根のねむの木こども美術館

まる谷が華やいでいます。ゆっくり観光しても楽しい場所です。

一番奥にある「ねむの木こども美術館」に入ってみました。ドングリをモチーフにした建物です。BGMには、ねむの木合唱団の「谷間に三つの鐘が鳴る」が流れます。描かれている絵は、色使いが鮮やかなこと、細かな絵を厭わずに仕上げていることなど、美術がわからない筆者を引き込みます。「3年半かかったのでテーマ忘れちゃった」という絵もあります。気持ちが洗われる気分になり、涙が出てきました。

ねむの木村の明るさと華やかさには、衝撃を受けました。生きることが難しい子どもでも、可能性を引き出されると、ここまで明るく華やかな世界を作ることができる。宮城まり子さんが「大きなおかあさん」としてきちんと見守っておられることが大きいのでしょう。人事の仕事に「社員の見守り」を付け加えたいところです。

(MBO実践支援センター代表)

